# 森の民としての日本人の空間認知

## ——縄文人の空間認知をめぐって——

安田喜憲

### 一　森の文化の原点

図1(1)には日本列島における最終氷期極寒期以降のブナ属花粉の出現率の変遷と古地理を示した。最終氷期極寒期にあたる二・一～一・八万年前の古地理図では、ブナ属の出現率は低い。これは大陸性の寒冷・乾燥した気候の下で、海洋性気候に適応したブナ林が、発展できなかったことを物語っている。ブナ属花粉が増加を開始するのは、晩氷期の一・三～一・二万年前に入ってからである。図1には一・一万年前の古地理図を示した。注目すべきは、ブナ属の拡大の中心地が、日本海側の北緯三九度以南の多雪地帯にあることである。ブナは冬期の乾燥に弱く、積雪によって冬期の凍結から根が保護され、春先の低温から若芽が保護される必要がある。近畿や北陸地方のブナ林の垂直分布の下限は、冬の降水量（積雪）と寒さの指数の積の絶対値と深いかかわりを持っている(2)。今西錦司の指摘するように(3)、ブナは裏日本型の多雪の環境に適応した植物である。このことから、一・三～一・二万年前に入ってからのブナ属の増加（ブナ属花粉の大半はブナとみられる）は、積雪量の増加を示しているとみることができる。そして、こ

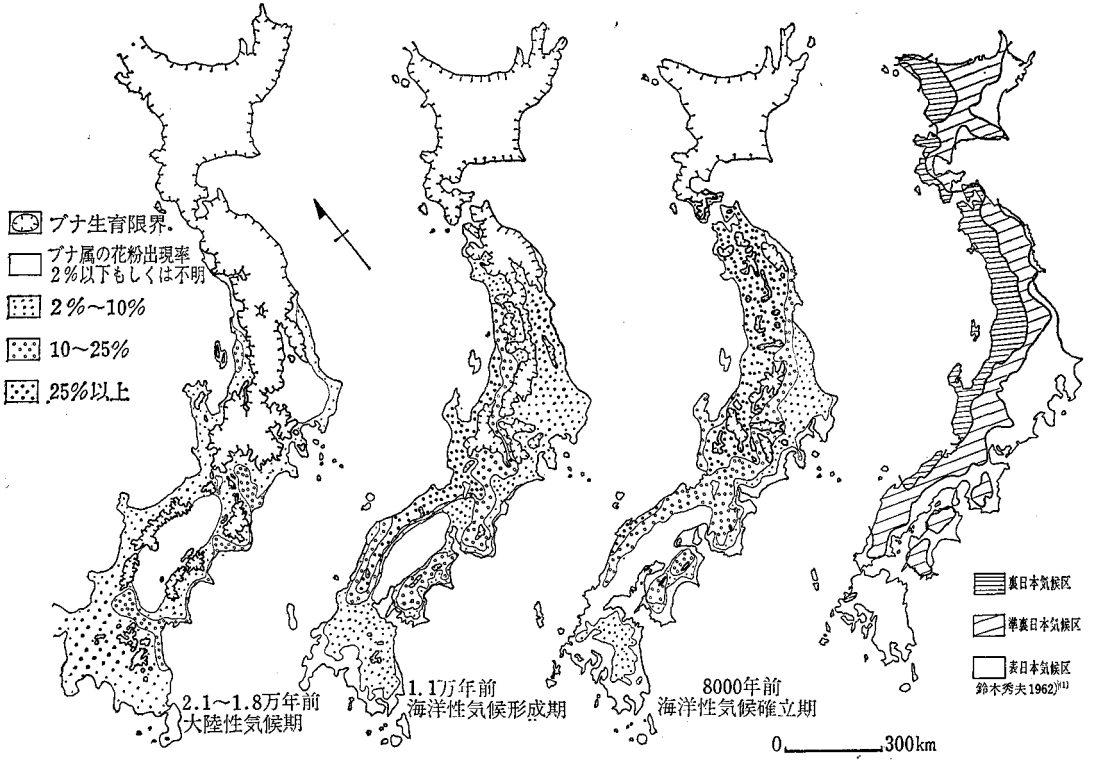


**図 1** ブナ属花粉の出現率の変遷と日本列島の現在の気候区分　　ブナ属花粉の増加は海洋性気候の発達を物語る。

の一・三～一・二万年前にはじまる積雪量の増加は、気候の温和化にともない極地の氷河が融解し、海面が上昇し、日本海に対馬暖流が流入を再開したことで説明できる。事実、日本海海底コアの有孔虫・酸素同位体比の分析は、この時代に入ってからの対馬暖流の日本海への流入の再開を明らかにしている(4)。日本海側に積雪量が増加する過程は、日本列島が大陸から分離し、孤立化していく過程でもある。いいかえれば、日本列島独自の海洋的風土の形成は、この多雪化とともにはじまったといえる。

ここで注目したいのは、一・三～一・二万年前を境として、ブナやナラ類の温帯の落葉広葉樹の生育に適した海洋的風土が形成されはじめた時、今のところ世界最古といわれる土器が北九州で誕生している事実である。長崎県福井洞穴遺跡の隆線文土器(5)や同県泉福寺洞穴遺跡の豆粒文土器(6)の時代は、一・三～一・一万年前である。世界最古の土器は、日本海に対馬暖流が流入を開始し、日本列島が大陸から切り離され、多雪という独自の海洋的風土が形成されはじめた時に誕生している。すなわち、世界最古の土器は、積雪量の増加によって、最適な生育条件を確保できたブナやナラ類の温帯の落葉広葉樹の森の中で誕生している。それは農耕の開始ではなく、ドングリなどの森の生産物への依存度が高くなった時、誕生した。この意味において、最古の土器文化は、温帯の落葉広葉樹の森の文化として出発したといえよう。福井県鳥浜貝塚では、一万一五〇〇年前から、多縄文系の土器を持つ人々が、ブナ林のなかで生活していたことが明らかとなっている(7)。そして温帯の落葉広葉樹の森の文化として出発した最古の土器文化の伝統は、その後の縄文時代早期以降の文化にも受継がれている。日本列島が大陸から切り離され、日本独自の海洋的風土が形成され始めるとともに誕生した最古の土器文化を、現在にまでつながる日本文明の原点とみたい。

日本列島に大陸型風土が支配的であった後期旧石器時代の文化は、今日の海洋的風土の下に発展した日本文明には

直接つながらないであろう。今日にまでつながる海洋的な日本文明発展の舞台の成立は、一・三～一・二万年前の晩氷期に入ってからである。そしてこの新たに出現した海洋的風土に適応した特徴的な自然と人間のかかわりあいのシステムが形成された時、いいかえれば海洋的な自然の生態系を自らの生活系にたくみに取り入れた普遍的な生活様式が確立した時こそが、今日の日本文明への胎動の第一歩である。新たに出現した海洋的な自然と人間のかかわりのシステムを最も明瞭に具現しているのが、ブナやナラ類の温帯の落葉広葉樹の森とのかかわりにおいてである。その森林とのかかわりが普遍的な生活様式として確立したことのあかしが、最古の土器の誕生とみたいのである。

日本列島に大陸とは異なった固有の海洋的風土が形成され、その海洋的風土に適応したブナ・ナラ類の温帯の落葉広葉樹の森の生態系に適応していくなかで誕生した最古の土器文化は、その後の一万年以上の長きにわたる縄文文化への出発点とみることができる。そして、後述する如く、縄文時代につちかわれた自然―人間系の下で熟成された日本人の自然観・世界観や空間認知の伝統は、その後の弥生時代・歴史時代にも受継がれ、日本文明進展の根幹を形成している。この意味において、現代にまでつながる日本人の伝統的な自然観・世界観の原点は、海洋的風土に適応した温帯の落葉広葉樹の森の文化として出発した最古の土器文化にもとめられよう。

人類史における土器誕生の系譜には、西アジアのように農耕の発展と深いかかわりを待つ系譜と、日本列島のように温帯の広葉樹の森への適応と深いかかわりを持つ二系統を認める必要があろう。日本文明の基層を形成する自然観・空間認知の原点は、この温帯の落葉広葉樹の森の文化として出発した最古の土器文化の時代にまでさかのぼるであろう。これに対して農耕の誕生とともに出発した西アジアとその延長線上にある地中海・ヨーロッパの諸文明の基層を形成する自然観や世界観が著しく異なるものであることは後述する如くであるが、その日本文明との間にある自然

観・世界観ひいては空間認知の相違を生みだす出発点は、この最古の土器文化の時代にまでさかのぼると思われる。ただ、現時点ではこの時代の人々の自然観や空間認知を明らかにできる資料は少ない。

## 二　季節を核とする循環システム

温帯の広葉樹の森の文化として出発した縄文人の空間認知を推測することができるのは、縄文時代前期に入ってからである。一九七五年から、私たちは福井県三方町鳥浜貝塚の調査にたずさわっている。縄文のタイムカプセルといわれるほど、その縄文時代前期を中心とする遺物包含層からの出土品は、目をみはるものがある(7)。丸木舟・漆塗櫛・縄・糸・木製品・編物・骨角器・石皿・石斧・石錘・石鏃等、縄文人の日常生活を物語る遺物は、枚挙にいとまない。さらに食料事情を物語る遺物として、農耕の片鱗を示すヒョウタン・エゴマ・緑豆・ゴボウの発見(8)がある。また、カワニナ・トンガリササノハ・イシガイ・マツカサガイ・カラスガイ・ヤマトシジミ・タニシ等の淡水産の貝類、サザエ・コシダカガンガラ・レイシ・マガキ・ハマグリ等の鹹水産の貝類、ブリ・クロダイ・フグの一種・カツオ・マグロ・サメの一種・キギ等の魚類、さらにシャチ・イルカ・アシカの骨も検出されている。またイノシシ・ニホンジカ・ニホンザル・ネズミの一種・イヌ・タヌキ・アナグマ・ツキノワグマ・テン・カワウソ・ニホンオオカミ・オオヤマネコ等の骨もみつかっている。なかでもイノシシとシカ・カモシカの骨が全体の九〇％以上を占める。そしてクルミ・クリ・ナラ類・アカガシ・スダジイ・カヤ・ムクノキ・ヤマボウシ・ブドウ・マタタビ等の食用にできる木の実・果実が多量に検出されている。ユリ科の球根もある(9)。

こうした膨大な出土品はいまだ整理・分析中であるが、その一部を分析した西田正規は、縄文人の季節カレンダー

を明らかにしている(9)。それによると、縄文人は春には山菜や魚貝類を、夏には魚と貝を、秋には木の実を、そして冬にはイノシシやシカの狩猟を行なっている。イノシシやシカを夏にみかけることはあったろう。しかし縄文人の狩猟活動は主として冬に行なわれている。

このことは、六〇〇〇年前の縄文人が、日本の海洋的風土を代表する明瞭な四季のリズムにあった生活のパターンを確立していたことを示す。六五〇〇年前は鳥浜貝塚周辺にも、現在と類似した照葉樹林の風土が確立した時代に相当しており、当時の年平均気温は現在よりやや高く、かつ積雪量も現在より少なかったとみられるが、季節のリズムは現在と大きな違いはないとみられる。縄文人はこうした四季の明瞭な風土に適応した生活様式を確立した。こうした縄文人の季節に対応した生活様式は、ほんの最近まで日本の山村で日常的に認められたものである。そして縄文人が食料採集のために最適の地として選んだ鳥浜貝塚の立地条件は、現代の我々の目からみても十分に納得のいくものである。

氷河時代には大陸性気候の下で、現在とはかなり異なった季節のパターンが存在したとみられるが、海洋的風土の形成とともに誕生した縄文文化は、温帯の広葉樹の森の生態系に適応をふかめるなかで、明瞭な四季のリズムに順化した生活様式を確立していったとみることができる。

鳥浜貝塚から出土した大型獣の骨は、大半が成獣のものであった。これは幼獣は殺すことなく翌年あるいは翌々年の冬まで待つという思想が存在したこと、人間・動物を含めた生態系は循環するものであり、それを破壊しては自分たちも生きられないという自然観の原形がみられる。このように、縄文時代前期には、季節を核とする自然―人間循環系の生活様式が確立していたとみることができる。

こうした季節の変化を核とする循環系の生活様式は、次の弥生時代にも受継れている。水田稲作農業は、縄文時代以来の季節を核とする自然―人間循環系の生活様式に付加される形で、日本人の生活の中に取り込まれていく。

## 三　里山の森を核とする地域システム

縄文時代に確立された季節を核とする自然―人間循環系の生活様式は、稲作伝播以降も大きく変わることなく受継れている。それは里山の森を核とする地域システムを持つ農耕社会の成立にみられる。その一例を瀬戸内海沿岸についてみる。

中国地方は年降水量一四〇〇～一五〇〇ミリメートルを境として、湿潤な中国山地・山陰と乾燥な瀬戸内海沿岸の二つの特徴的な生態地域が存在する。この二つの生態地域は水田農業が伝播した弥生時代以降、著しくその特色をきわだたせてくる。

図2(10)に示すように、瀬戸内海沿岸には、ハゲ山・アカマツ林・タメ池・塩田が集中的に分布している。瀬戸内海沿岸には、里山の森を核とする以下のような地域システムが農耕社会に入って形成された。すなわち、瀬戸内海沿岸の花崗岩地帯では、水田農業伝播以降、原植生としての照葉樹林が破壊された。その一例を図3の広島県東広島市松子山大池の花粉ダイアグラムでみたい。タメ池が造成された初期には、アカガシ亜属・シイノキ属などの照葉樹の花粉が高い出現率を示し、カシ・シイ類の照葉樹が広く残存していた。周辺からの土砂の流入量も少なく、タメ池の周辺にはカヤツリグサ科・イネ科の湿原が発達していた。ところがその上位、近世中頃と推定される堆積物では、二葉マツ亜属の花粉が増加し、アカガシ亜属・シイノキ属などの照葉樹の花粉が減少する。このことは照葉樹林が破壊

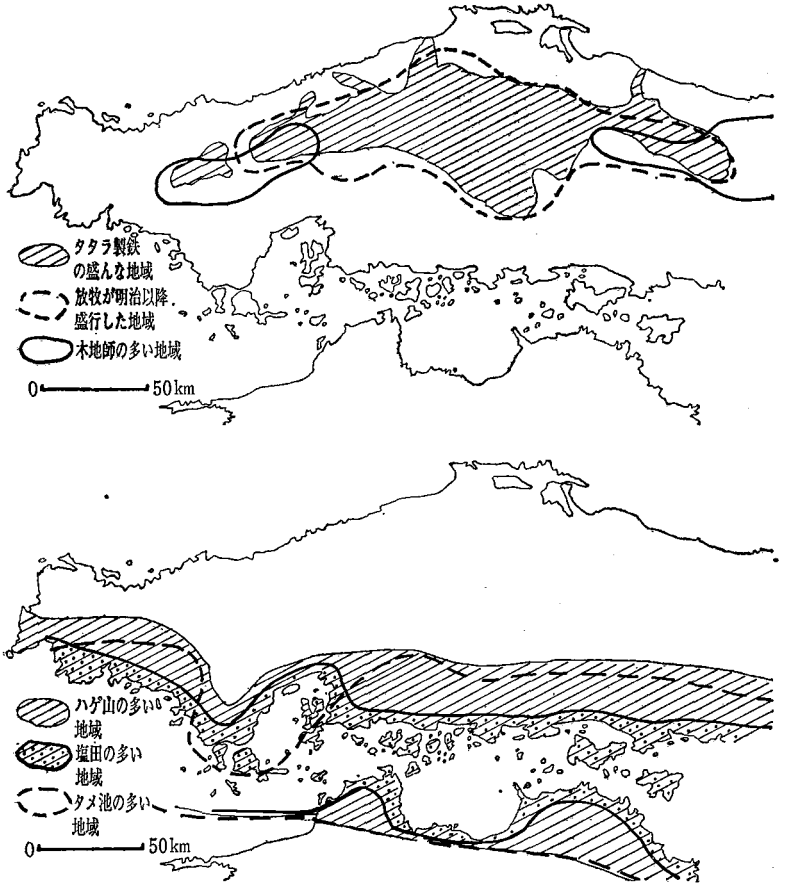


**図 2** 近世～明治の特徴的な生業関連の分布図
〔千葉1973，石田1961，内藤1976，鈴木1978，武井1972，谷口他1978，渡辺1960等による〕

され、二次林としてのアカマツ林が拡大してきたことを示す。コナラやクヌギの雑木林を含むコナラ亜属は一次的に減少するが、再び出現率を増加し、二次林としてのコナラ・クヌギ林が拡大した。そしてこの時代に入ると、堆積物が泥炭からシルト質砂礫層に変化する。それは森林の破壊により、土壌浸蝕の増加で、土砂礫が湿原内に流

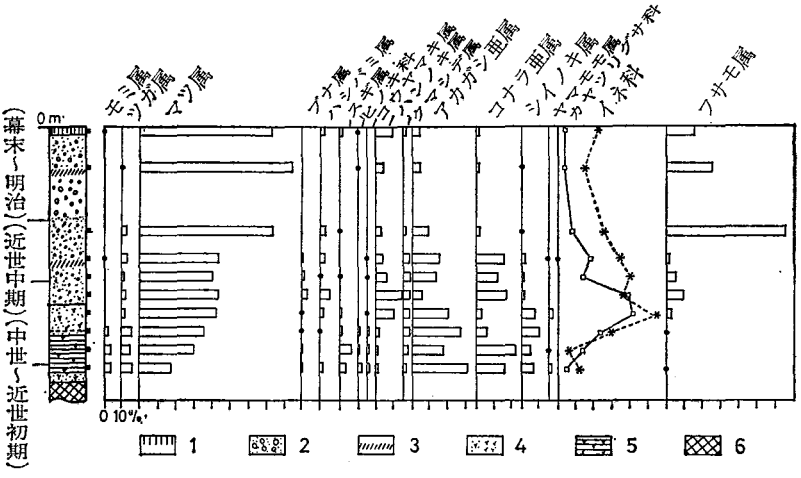


**図 3**　広島県東広島市松子山大池花粉ダイアグラム

1表土，2砂礫，3シルト，4腐植混り砂，5有機質粘土～泥炭，6基盤

れ込み始めたことを示している。そして地表下一二〇センチメートルの層準を境として、二葉マツ亜属が八〇%以上の高率を示し、コナラ亜属をはじめ広葉樹の花粉の出現率は著しく低下もしくは消滅する。これはアカマツ林の繁茂を示すというより、林地の荒廃を物語る。そしてこの時代に入ると堆積物がシルト分の少ないより粗粒の砂礫層に変化するにもかかわらず、水生植物のフサモ属が急増してくる。このことは、林地の著しい荒廃により森林の保水力が弱まったために、タメ池の築堤をかさ上げして、降水を保存しなければならなくなり（新田などの造成でより多くの用水を必要としたこともある）、タメ池の水位が上昇したことを物語る。瀬戸内海沿岸の農耕社会に入ってからの照葉樹林からアカマツ林への変化は、地域差・時間差はあるものの、おおむね類似した変遷をとげている。

森林が破壊されると土壌浸蝕によって下流域には扇状地性の三角州が形成される。内海のため潮流が弱いことは、扇状地性三角州の発達に幸いであった。日照時間が長く、

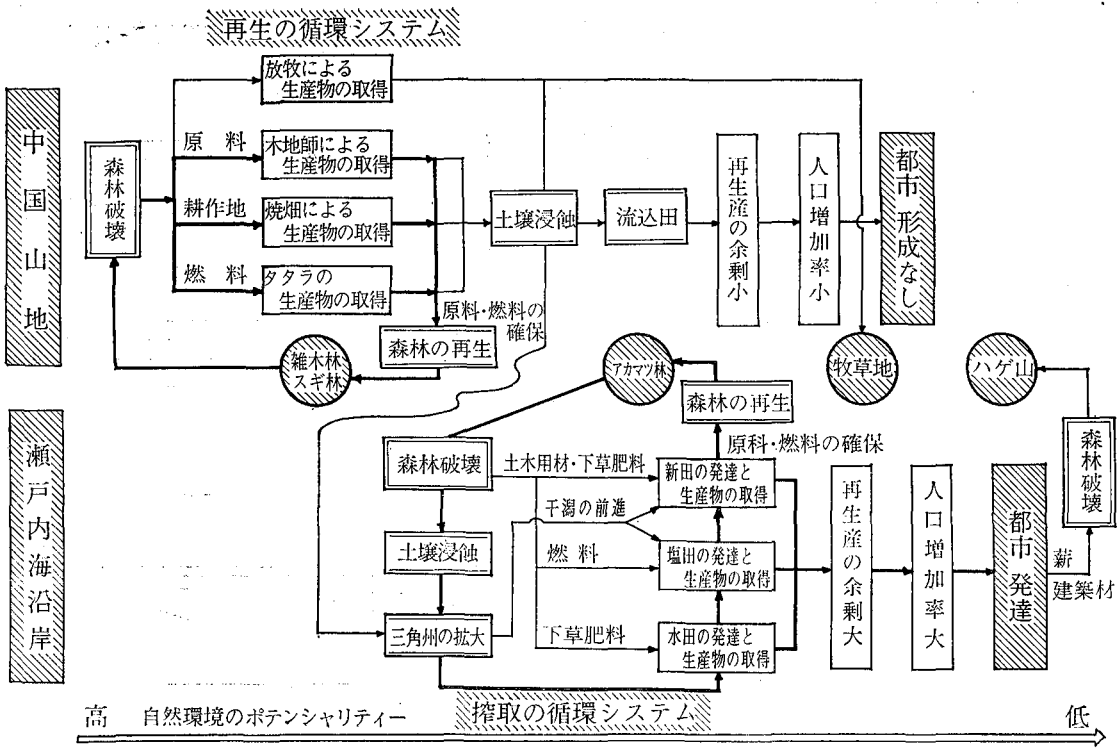


図 4　中国山地と瀬戸内海沿岸における再生と循環のシステム

夏期の最高気温が三〇度以上に達する日が多く、水田に適した三角州の発達する瀬戸内海沿岸に、弥生時代遺跡や条里型地割が集中する(11)のは当然である。さらに中世から近世に入ってこの地域を特色づける入浜式塩田にとっても、こうした自然的要因は幸いした。水田農業の発達と塩田の盛行は、さらに新しい土地の収奪を生む。そしてその林地の収奪は新たな土壌浸蝕を引き起し、下流域に塩田に適した干潟を発達させる。古い塩田は新田として開発される。また山間部でのタタラによるかんな流しによる山地斜面の破壊も、下流域に干潟を発達させる大きな要因であった。西村嘉助(12)は、広島三角州では五〇年位の間隔で新田の造成期があり、一回の造成で二〇〇町歩前後の干潟が干拓されていたことを明らかにしている。こうした塩田や新田の造成は、人口の増加をもたらし、新しい集落を発生させる。広島県の近世以降に成立した集落は、大半が瀬戸内海沿岸部に集中している(13)。

新田には綿等の商品作物が栽培された。塩とこうした商品作物は瀬戸内海の海運の発展の中で、市場と流通が保証された。こうして瀬戸内海沿岸では、交易の中心となる港町や商業都市が成立・発展していく。人口の増加、都市的生活者の増加は、ますます林地の収奪を大きくする。そしてその林地の収奪は再び下流域に新たな干潟を発達させ、人口の増加をもたらす場を提供する。それを図示すると図4のようになる。

この型のシステムを取る地域においては、人間の搾取が自然（この場合はアカマツ林）の再生力を超過しない限り、人類の文明は無限に発展するかにみえる。しかし、近世中頃以降、アカマツ林の再生力がこの地域の人口増加率を可容できなくなるとともに、里山の森をめぐって、いくつかの社会問題が多発するようになる。まず沿岸部での塩田や都市の発達は、塩木や都市への薪・炭の供給源として、山林の商品化をおしすすめた。近世中頃以降の森林資源の需要の増加と枯渇のなかで、藩が森林利用に厳重な統制を加えるようになる。岡山市中ではすでに近世のはじめか

ら薪不足がみられた(14)。広島の浅野藩は、近世初期に林制を確立し、御建山・御留山・野山（草山）・腰林に区別して、管理・統制を行なっている(15)。山林の利用にはいくつかのきびしい制限が、とりわけ近世中頃以降実施されるようになる。藩の統制下にある御建山・御留山では、材木はもとより、狩猟・草刈まで厳重に禁ぜられている。そしてこれを犯せば、直ちに重罪に問われ、厳刑に処せられた。

地域社会の核となってきた里山の森林資源が枯渇しはじめるとともに、藩は強力な統制・管理を実施せざるを得なかった。そうしないことには、その地域社会を維持できなかったからである。

森林資源の枯渇の社会的影響を物語るものとして、近世中頃以降に多発してくる「山論」がある。「山論」は主として村の共有林野である野山・草山をめぐって引き起されている。広島県安佐郡大林村では、寛文一二～一三年（一六七二～七三）、天明六～寛政三年（一七八六～九一）、天明八年、文化一一～文政二年（一八一四～一九）の間に「山論」が起っている(16)。その原因の大半は、一方の村がこれまでの慣行を破って、他村の野山・草山に入り、採草や薪を取ることにある。また、図5(17)には岡山県児島郡味野村の牛の飼育頭数と人口の変遷を示した。近世中頃以降、人口の増加に反比例して、牛の頭数は急減している。これは森林資源が枯渇し、「山論」

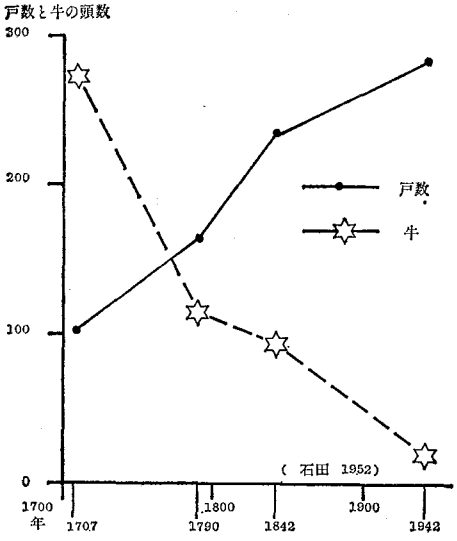


**図 5** 岡山県児島郡味野村における近世の家畜（牛）頭数と戸数の変遷 〔安田1984〕(24)

が多発するなかで、野山に草をはやして牛を放牧することが許されなくなったことを示しているのであろう。ヨーロッパでは、近世における人口の増加と家畜頭数の増加は、正の相関を示す。ところがここでは、人口増と牛の飼育頭数は負の相関を示している。このことは、日本の農耕社会が家畜よりも森林資源により強く依存していたあかしである。ヨーロッパの農耕社会が家畜に依存し、森林とは敵対的な農耕社会を作り上げた(18)のとは大きく異なっている。日本人は農耕社会に入ってからも家畜より森を選んだ。その背景には縄文時代以来の森の民としての伝統が深くかかっている。家畜は森を破壊し、その再生を不可能にする。近世中頃以降、森林資源が枯渇するなかで、里山の森を核とした地域社会を維持するためには、家畜はむしろ障害となった。

このように瀬戸内海沿岸の農耕社会の生産力の発展は、アカマツ林の再生力に強く依存していた。アカマツ林の再生力が人口の増加率をはるかにうわまわっている間は、この地域社会の未来はバラ色に輝いていた。しかし、近世中頃以降、人口が増加し、人間の搾取が自然の再生力をうわまわった時、この地域システムの下に発展した農耕社会にもかげりがみえ始めた。それは人口増加率に明示されている。例えば、広島県豊田郡高崎村・福田村の近世の人口増加率をみると、正徳年間から安政年間（一七一五～七四）の間の増加率は著しいが、天明年間（一七八六～）以降の増加率は停滞している(19)。

アカマツ林の再生力がその地域の人口の増加を可容できなくなるとともに、人々はアカマツ林の保護と再生をはかりながら搾取をつづけていく循環システムを取らざるをえなくなる。森林の再生力に強く依存した日本の農耕社会は、循環の地域システムを取らざるを得ない。したがって、その自然―人間系は閉鎖系であり、人々の空間認知も円環的・循環的とならざるを得ない。私は瀬戸内海沿岸のアカマツ林の里山を核とする地域システムを、搾取の循環シ

ステムと呼んだ(20)。

## 四　山村の崩壊が意味するもの

瀬戸内海沿岸に対し、湿潤な中国山地の里山を代表する森は、スギと雑木林である。中国山地が一つの生態地域としてきわだってくるのは古墳時代に入ってからである。その理由の一つに、タタラによる砂鉄の生産があげられる。タタラには大量の炭が燃料として必要である。宝暦から天明期において、二つの吹子のあるタタラでは、一夜に一二〇〇貫の炭を使用している(21)。この炭の原料となったのは、クヌギ・コナラ等の雑木林である。タタラは木をもとめて移動した。しかし、瀬戸内海沿岸のアカマツ林の収奪のように、この中国山地では雑木林の収奪が、直接再生産にはむすびつかなかった。タタラによる地形改変量は大きく(22)、内陸盆地には、流込田と呼ばれる水田を造ったが、それが下流域に影響を与え新田を造成した規模に比べるとはるかに小さい。雑木林の一方的な収奪は、その地域社会の崩壊につながる。ここでは、自然からの収奪がそのまま再生産にはむすびつかない。

ただこうしたコナラ・クヌギなどの雑木林は萌芽力が大きく、年降水量の多いこの地では人間が自然を再生する配慮さえ行なえば、十分に自然萌芽によって森は回復する。中国山地の農業の基本は、中世までは主として焼畑の雑穀栽培にあった。また木地師による森林利用も、森林の再生を念頭におく必要がある。自然からの搾取のあとには、自然を必ずもとどおりに再生することが、この地域社会を維持していくための鉄則であった。例えば、図6(23)には岡山県真庭郡川上村蛇ガ乢湿原の花粉ダイアグラムを示した。およそ一五〇〇年前よりコナラ亜属が減少傾向を示し、二葉マツ亜属が増加に転じ、森林の破壊が始まったことを示す。ただし、その後の二葉マツ亜属の増加率は瀬戸内海沿

岸に比してはるかに小さく、二〇%前後にとどまっている。そしてコナラ亜属やブナ属は近年まで高い出現率を保持しており、雑木林が継続的に維持されていることを示している。

中国山地では自然からの収奪に当初から限界があった。そこでは自然の再生をはかりながら、人口や生産力を一定の水準に維持していくしかなかった。その社会の発展はその地域の自然の可容力に強く規制されていた。私はこうした自然—人間系の地域システムを再生の循環システムと呼んだ(20)。中国山地に展開する自然—人間系は、基本的には縄文時代の循環システムと大きくかわらない。中国山地の山村には、一万年以上にわたって縄文時代以来の自然—人間系の循環システムが連綿と受継れていた。私はそこに森の文化を基層とする自然—人間循環系の文明の永続性をみた(24)。そして永続性の高い文化を支える森の民の空間認知もまた円環的・循環的であったといえよう。

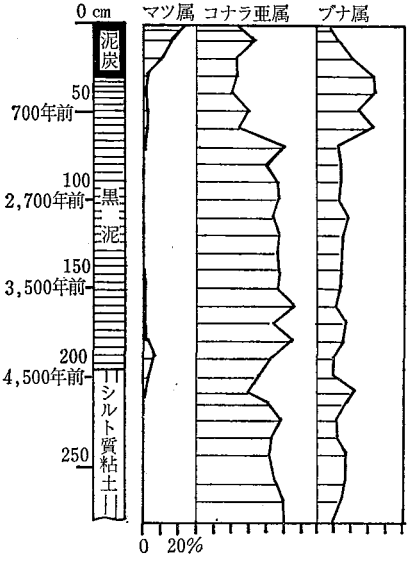


**図 6**　岡山県真庭郡川上村蛇ガ叺湿原（海抜700m）の花粉ダイアグラム

〔三好他1975〕

ところがその山村が昭和三〇年代後半以降、急速に崩壊をはじめた。山村の崩壊は大都市の発展と裏腹の関係にある。それは西欧文明の影響下で、日本の経済構造が都市中心型に展開していくなかで引き起されている。少なくとも昭和三〇年代の前半までは、日本の山村は相対的に自立性を保持していた。ところが三〇年代の後半に入って、山村は急速に崩壊していく。その崩壊をもたらしたのは、日本の過重なまでの工業技術文明へ

の傾斜であった。その工業技術文明とは、自然―人間搾取系の地域システムに立脚している。都市化の波のなかで山村が崩壊している姿は、地中海文明に端を発し、西欧で開花した自然―人間搾取系の文明が、縄文時代以来の自然―人間循環系の文明地帯へ侵入し、それを打ち崩している様として私にはみえる。

山村の崩壊は、縄文時代以来一万年以上にわたって森の文化を維持してきた文明地帯の崩壊である。今後、日本の文明史において、山村が急速に崩壊した昭和三〇年代後半から四〇年代にかけては、きわめて重要な時代となろう。なぜなら、その時代は縄文時代以来、日本文化の基層を形成してきた森の文化の伝統が、はげしくつき崩され、森の文化の断絶が始まった時代であるからである。

山村の崩壊はまず都市への人口流出から始まった。すなわち過疎である。こうした人口の減少とともに、山村の経済的基盤を弱化させたのは、エネルギー需要の変化にともなう炭の価格の下落である。例えば、中国山地の島根県邑智郡大和村では、村の八五・八%が山林であり、その山林の九二%が薪炭用の雑木林であった。昭和三三年の製炭戸数は四三〇戸、出炭量は一一万五四七二俵に達している。ところが、昭和三七年には製炭戸数が七～八戸に激減している(25)。その背景には石油・ガスの普及による炭価の暴落があった。この時期を境として、大和村の人口も急減していく。再生の循環システムを持つ地域の核となってきた薪炭林・里山の森が、突然経済的に無価値になる。外材の輸入はそれに拍車をかけた。そして里山の森を核とする循環系の地域システムが崩壊した。山村をなんとか自立させてきた里山の森を核とする循環系の地域システムの崩壊は、山村の地域構造を根底からゆるがすことになった。そして、一万年以上にわたる永続性の高い森の文化の伝統が急速に消滅していった。

地理学者のすぐれた山村変貌の研究は、現代文明を考える上で、もっと注目されてもよいように思われる。ただこ

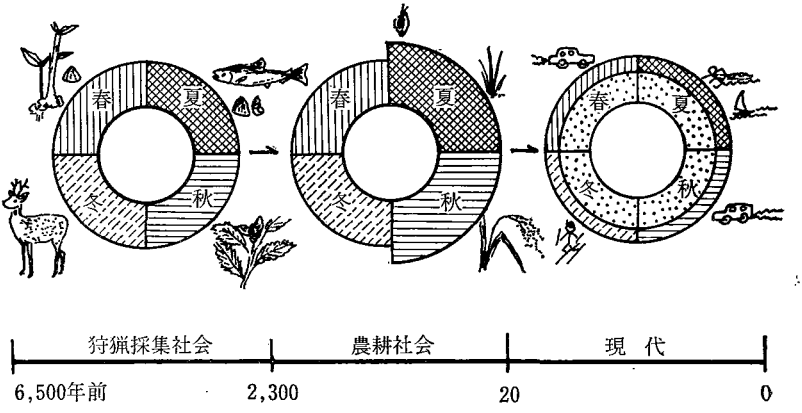


**図 7**　縄文時代以降の季節を核とする循環システムの変遷
縄文時代から弥生時代を通して永続的に存在した自然—人間循環系のシステムが，高度経済成長期を境として崩壊していく。

れまでの地理学のアプローチは、山村崩壊の現状分析に終始し、その文明史的位置づけはあまり行なわれていないように思う。昭和三〇年代後半から四〇年代にかけての山村の崩壊は、あまりにドラスティックであり、その現実に目をうばわれ、背後にある人類文明の大きな流れには目がとどかなかったのかもしれない。あれから二〇年後の今日、いまようやくにして、山村崩壊の日本文明史における位置づけが、わかりはじめたのかもしれない。

日本の山村の崩壊は、縄文時代以来、日本文化の基層を形成してきた永続性の高い自然—人間循環系の森の文化の断絶が始ったことを意味する。一万年以上にわたって森を核とした循環系の地域システムを持つ森の文化が、地中海文明の延長線上に発展した自然—人間搾取系の近代工業技術文明の蔓延の中で消滅しようとしている。山村の衰退は、自然—人間循環系の地域システムの崩壊をもたらしたのみでなく、伝統的な日本人の森の民としての自然観・空間認知に大きな変更をせまり、円環的・循環的世界観の崩壊が始まっている。

都市に住む子供はもちろんのこと、農・山村に住む子供にとっても、自然とのふれあいは、もはやレジャーを通してしかなされていない。これが二一世紀を担う世代の季節感・生活のリズムである（図7）。縄文時代以来の季節を核とする自然―人間循環系の生活様式は、弥生時代にも受継がれ、高度経済成長期以前の山村の生活のなかにまで連綿とつづいていた。しかし、わずかここ二〇年の間に、こうした自然―人間循環系の文明が急速に衰え、森の民としての伝統的な自然観・空間認知までが今、急速に姿を消そうとしている。二〇世紀後半の我々は、永続性の高い自然―人間循環系に立脚した文明の崩壊のまっただなかに生きているのではないだろうか。

## 五　森の民の空間認知の文明史における再検討

「西洋の歴史哲学が深くキリスト教的である(26)ように、西洋人の自然観（空間認知も含む）も深くキリスト教的である。これに対して日本人の自然観は、深く仏教的世界と結びついている。こうした西洋と東洋の自然観の相違を、キリスト教と仏教の二大宗教との関連で論じたのは鈴木秀夫(27)である。鈴木はこう記している。「同じ静寂といっても、森林に充ち満ちた生気に取り囲まれ、その一部として息づくインドの瞑想者と、人里を離れれば、砂塵の中で、わが身はかき消され、嵐を起こす神は遠くにあって、砂漠の中の一点にない我が身が、決して宇宙の中心となり得ないイスラエルの予言者とは何と対照的であることか」(28)。砂漠の中で生れたキリスト教では、神としての創造主は、まず人間をつくり、つづいて人間に利用されるために家畜（自然）を造った。このことによって西欧の牧畜民たちは、生きるために動物を殺して食べるという罪悪感からのがれるとともに、彼らの思考体系の中には、神―人間―動植物を含めた自然というタテ系列の思考体系が形成され、差別意識とともに、西欧の自然観を大きく決定づけて

いる(29)。超越的な神は唯一絶対であり、自然は神によって創造されたものであり、その運行は神の摂理のもとにあり、神の意志による終末の運命をもつ(30)。

これに対して、森の中に誕生した仏教的世界では、神は自然の外にあるものではなく、創造者でもなく、人間とともに自然の中にある。その神は唯一神ではなく、きわめて寛容的であり、所与の存在としての世界も茫漠としている。永却に輪廻する世界は、神の意志による終末の運命を持たない(30)。そこでは人間と自然の関係は併列的であり、自然は時としては神の宿る人間以上の崇高な存在でさえあった。神―自然―人間の間には、明白な序列はなく、錯綜しており、循環的である。自然と人間の関係において、キリスト教的自然観が直線的・発展的であるのに対し、仏教的自然観は併列的・円環的である。こうした円環的な神を含めた自然と人間の循環系の自然観は、日本においては、すでに遠く縄文時代にその原形が形成されていた（第二章参照）。そうした循環系の自然観は、農耕伝播以降にも受継がれ、里山の森を核とした循環の地域システムが形成されていた（第三章参照）。仏教が日本へ伝来する以前に、日本列島では円環的な仏教的世界観を受け入れる素地ができあがっていたのである。キリスト教の日本への伝来の歴史が、苦難の歴史であるのに対し、仏教が大きな抵抗はあったものの、その後日本の国民宗教にとりいれられていった背景には、こうした共通の自然観・円環的世界観が、すでに形成されていたからであろう。

神―人間―自然をタテ系列にとらえる西洋的自然観の下では、人間は神から自然に鋭いメスを加え、これを分析する権利を与えられている。この自然観の下で、近代科学が発展し、これが今日の工業技術文明を発展させる重要な原動力となっていることは、衆知の事である。しかし反面、科学的真理だけが、世界についての理解をもたらすという「物質至上主義」を生むことになり、分析的思考に基づく物質文明が、自然と人間の調和ある営みをおびやかし始め

ている。高度経済成長期における、日本の伝統的な森の文化を断絶させる出発点となった山村の崩壊や（第四章参照）、公害を生みだした自然の破壊は、物質文明が、自然と人間の調和ある営みを破壊した典型である。この西洋的自然観の下では、自然を保護するという発想は生れても、自然と調和・融合し、自然とともにあり、自然を生かし己をも生かすという綜合的思考の探求はむずかしい。そうした思想は、東洋的自然観の中に長くはぐくまれてきた。池見酉次郎の言葉を借りれば、「東洋人は自己を知るのみか、自己がどの程度までに自然そのものであるかを知っている(31)」。そこには、西洋の近代科学の下における自然保護の思想をはるかに越えるものがあると、私は思う。自然を保護する対象、言い変えれば、人間の力によって、維持・管理するとみるのではなく、自然を生かすとともに己をも生かす。自然と人間の間に、調和と融合を求めようとする東洋的自然観の下における自然保護が、今みなおされなければならない。そして、その自然観に立脚した歴史観・世界観の構築が、工業技術文明の物質至上主義の弊害を脱却し、新しい文明概念の創造のために必要なのである。

すでに西洋の自然観が、キリスト教に大きく影響されていると書いたが、その上に立脚した歴史観もまた、キリスト教的であった。ヘーゲルにおいては、人類の歴史は、自由意識の発展・自我の確立の過程であり、世界史は、絶対精神の弁証法的な自己発展であった(32)。マルクスにおいては階級闘争が歴史発展の原動力であった。ヘーゲルにおける東洋的世界↓ギリシア的世界↓ローマ的世界↓ゲルマン的世界への歴史の発展コース、マルクスにおけるアジア的共同体↓古代的同共体↓近代ブルジョア的共同体へという世界史の図式が、キリスト教的世界観に影響された直線的発展史観であることは、多くの研究者によって指摘されてきた(33)。そして、この直線的発展史観・進歩史観の上に立脚する近代科学技術文明がもたらした物質的富が、「人類はまさに歴史発展のエスカレーターに乗って無限に発展

する」(34)というが如き錯覚を、一九～二〇世紀の人々にもたらした。そこでは、科学的なものは正義であり真理であった。自然は限りなく搾取できるものであり、その搾取の上に立って、人類の文明も終末の世界に向って限りなく発展する。今日の著しい自然破壊の根源には、この直線的発展史観が横たわっていることは否定できない。しかし、二〇世紀後半に入り、この進歩史観に立脚した工業技術文明が、人類と自然の共存という大問題に直面した時、ゆきづまった。もはやこの進歩史観・発展史観からは、未来の自然と人類の調和的共存への理念は、生まれ得ないのではないか。梅原猛の一文をいま一度引用しよう。「今世界を支配しているのは進歩史観である。それは一直線な進歩史観か、それとも世界の破滅と新しい神の国の到来を説く終末史観かどちらかである。人類の破滅をどちらの歴史観も予想すらできない。…(中略)…そしてこの楽観的な終末観ないし進歩史観が彼らの愚かしい軍備拡張競争を止めさせはしないのである」(35)。今日の核戦争への危機もまさに、こうした終末観をもつ進歩史観の延長線上にある限り、防ぎようがないのであろう。そして自然の破壊もこの進歩史観・発展史観の下に、急速に押し進められている。一万年以上にわたって、日本人が森の文化の伝統の上に維持してきた循環系の自然観や仏教の因果応報の教え、〝たたり〟の思想は非科学的・迷信の衣を着せられ、片隅に追いやられた。そして、今世界は核の恐怖と自然破壊のなかで、破滅的方向に突き進もうとしているかにみえる。

私は、こうした西洋的自然観に立脚した直線的発展史観が、すべての悪の根源だなどというつもりはもうとうない。ただ、二〇世紀後半の今日、このキリスト教的な世界観の陰影と深く結びついている西洋的自然観・直線史観・発展史観では、もはや次代の文明を支えきれない状況に至っていることを指摘したいのである。いまこそ、縄文時代以来の森の民としての日本人の心奥に、脈々と受継がれてきた自然観・空間認知をみなおし、その自然観に立脚した

歴史観・世界観の構築が望まれているのである。

## 付記

環境認識・空間認知という用語をはじめて教えられたのは、能登志雄先生からであった。先生は人間のパーセプションの客観化の重要性を一九七〇年代の初めにすでに指摘されている(36)。そして本稿を作成するにあたっては、西村嘉助先生の広島大学時代のご研究から教えられるところが多かった。限られた資源の中でいかに人類の文明の繁栄を維持していくかが大きな課題になっている今日、芸備地方史研究などに掲載された一連の研究成果は、三〇年後の今日においてもきわめて示唆に富むものである。人類の自然観・空間認知が、その未来の文明の存亡にまでかかわるきわめて重要な課題であることを教えられたのは、鈴木秀夫先生の著書を通してである。これらの先生方の学恩に深い敬意と感謝を表するものである。

## 注・参考文献


(1) 鈴木秀夫「日本の気候区分」地理学評論三五、一九六二

(2) Kure, H. and Yoda, K. 'The effects of the Japan Sea climate on the abnormal distribution of Japanese beech forests', *Jap. J. Ecol.*, 34, 1984, p.63—73

(3) 今西錦司「日本アルプスの垂直分布帯」(『今西錦司全集第八巻』講談社、一九七五)、一六九〜二六三頁

(4) 大場忠道・堀部純男・北里洋「日本海の二本のコアによる最終氷期以降の古環境解析」考古学と自然科学一三、一九八〇

(5) 芹沢長介『日本旧石器時代』岩波新書、一九八二

(6) 麻生 優「縄文文化の成立」歴史公論二、一九七六

(7) 鳥浜貝塚研究グループ編『鳥浜貝塚』福井県教育委員会、一九七九

(8) 笠原安夫「鳥浜貝塚(第六次発掘)の植物種子の検出と同定について」(『鳥浜貝塚』若狭歴史民俗資料館、一九八三)、四七〜六四頁

(9) 西田正規「縄文時代の食料資源と生業活動」季刊人類学一一、一九八一

(10)　千葉徳爾『はげ山の文化』学生社、一九七
石三田寛「農業地域における牧畜」野間三郎編『生態地理学』朝倉書店、一九六一）五～七五頁
内藤正中『山陰の風土と歴史』山川出版、一九七六
鈴木秀夫『森林の思考・砂漠の思考』NHKブックス、一九七八
武井博明『近世製鉄史論』三一書房、一九七二
谷口澄夫・後藤陽一・石田寛『瀬戸内の風土と歴史』山川出版、一九七八
渡辺則文『広島県塩業史』広島県塩業組合連合会、一九六〇
(11)　安田喜憲『環境考古学事始』NHKブックス、一九八〇
(12)　西村嘉助「海岸における土地開発と綿作・製塩の発達」芸備地方史研究一五、一九五八
(13)　西村嘉助「広島県の土地開発」人文地理五、一九五三
(14)　千葉徳爾　前掲(10)
(15)　山田繁「御建恵下谷山・御留不明谷山」芸備地方史研究三九、一九六一
(16)　西村嘉助「大林村―山と谷の生活」芸備地方史研究三一、一九六〇
(17)　石田寛「瀬戸内海地域の畜牛の歴史地理学的研究」瀬戸内海研究三、一九五二
(18)　安田喜憲「日本文化をささえた木」自然と文化　夏季号、一九八二
(19)　西村嘉助「海岸農村の土地と人口」芸備地方史研究一二、一九五五
(20)　安田喜憲「中国地方における生態地域システムの構造と変容」（藤原健蔵編『地域システムの構造と変容』文部省科研成果報告書）四三～五四頁
(21)　武井博昭　前掲(10)
(22)　赤木祥彦「中国山地における鑪製鉄による地形改変土量と鉄生産(上)・(下)」地理科学三七、一九八二
(23)　三好教夫・波田善夫「中国地方湿源堆積物の花粉分析学的研究I」第四紀研究一四、一九七五
(24)　安田喜憲「森の文化―生態史的日本論」現代思想七、一九八四

(25) 大川健嗣「中国山村における炭焼き村の解体と再編」(斉藤晴造編著『過疎の実証分析』法政大学出版局、一九七六、三九九～四二八頁

(26) 神山四郎「近代歴史哲学の批判」(田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院、一九六三) 三四一～三六四頁

(27) 鈴木秀夫『超越者と風土』大明堂、一九七六

(28) 前掲(27)七八頁

(29) 池見酉次郎『セルフコントロールの医学』NHKブックス、一九七八

(30) 石田英一郎『人間と文化の探求』文芸春秋、一九七〇、九四～九六頁

(31) 前掲(29)二九頁

(32) 林健太郎「世界史の問題」(田中美知太郎編『歴史理論と歴史哲学』人文書院、一九六三)、二七〇～二九二頁

(33) 例えば、上山春平『歴史と価値』岩波書店、一九七二

(34) 梅原 猛『仏教の思想』角川書店、一九八〇、九二頁

(35) 前掲(34)、九三頁

(36) 能登志雄「人間と環境のかかわりあい」地理一八、一九七三